

**令和7年度**  
**「パラスポーツ推進プロジェクト**  
**(障害のある人へのスポーツ指導等研修会**  
**の事例集作成事業)」**  
**委託事業成果報告書**

**令和8年3月**

**株式会社リベルタス・コンサルティング**

# 目 次

第 1 章 調査実施概要.....	1
第 2 章 事例ヒアリング調査.....	3
第 3 章 受講者アンケート結果.....	38
第 4 章 まとめ.....	53



# 第1章 調査実施概要

## I. 調査名

令和7年度「パラスポーツ推進プロジェクト（障害のある方へのスポーツ指導等研修会の事例集作成事業）」

## II. 調査目的

障害のある人が、より身近な地域でスポーツを実施できる環境を整備していくためには、指導の担い手が質的にも量的にも充実する必要がある。一方で、障害のある人がスポーツに接し支援を受ける場面においては、必ずしもパラスポーツ指導員のような障害者スポーツを専門とする者にとどまらず、広く一般を対象とする指導者等においても、障害者を指導するにあたっての基本的な知識を有することが望ましい。

スポーツ審議会健康スポーツ部会障害者スポーツ振興ワーキンググループの最終報告書（令和6年7月25日公表）においては、「各教育委員会における教員研修や日本スポーツ協会スポーツ指導者向けの研修会や各種会議など、障害者への指導を専門とはしない指導者等が障害者スポーツへの理解を深めるための研修等の充実」「幅広く一般のスポーツ施設の職員の障害者スポーツへの理解を深めるため、例えば、公共施設の指定管理者の職員等の研修参加が促進される方策の検討」との提言がなされた。

こうした中で、スポーツ庁においては、令和6年度委託事業「障害者スポーツ推進プロジェクト（スポーツ指導者やボランティア等のスポーツを支える人のための障害者対応指導ツールの改訂等）」において、「障害のある人へのスポーツ指導・関わり方 入門ハンドブック」（以下「ハンドブック」という）を作成した。ハンドブックは、主に障害のある人のスポーツ指導に関わったことのないスポーツ指導者を対象としているが、活用することにより、スポーツを実施する方の特徴を踏まえた多様な指導方法の習得や、インクルーシブなスポーツの実施環境を整備に繋がる他、運動の苦手な方への指導や、子ども・高齢者への指導等、指導の対象や範囲の拡大も見込まれるものである。

これらのことから、本事業は、上記の提言を踏まえ、スポーツにおいて障害のある人とスポーツで関わる、又は今後その可能性のある指導者等に対し、全国各地で様々な実施主体により行われている研修等について、事例収集を行い、事例集を作成することを目的として、実施する。

## 1. 調査概要

本事業では、以下（1）～（4）の調査を実施した。

### (1)事例の選定

スポーツにおいて障害のある人と関わる、又は今後その可能性のある指導者等に対し、行われている研修について、事例の収集を行うため、スポーツ庁と協議の上、対象を選定した。収集する研修の対象については、以下のとおり。

受講対象	①学校教員（特別支援学校・特別支援学級に限らず、小学校・中学校・高校の体育指導に当たる教師等） ②学生（体育・スポーツ関係、教職課程） ③スポーツクラブ職員等（総合型スポーツクラブ、民間のスポーツクラブ、スポーツ少年団含む） ④その他（スポーツ施設職員等、スポーツイベントや大会等のボランティア、医療関係者、福祉関係者等）
実施形態	対面か否か問わない
実施内容	研修内において、必ず、令和6年度スポーツ庁委託事業において作成した「障害のある方へのスポーツ指導・関わり方 入門ハンドブック」の活用を含めていること。なお、必要に応じて、実技が含まれていても差し支えない。

## (2)ヒアリングの実施（現地調査、オンラインヒアリング又は書面ヒアリング）

（1）で選定した対象（計 17 件）について、（3）の事例集の作成を目的として、それぞれ、現地調査、オンラインヒアリング又は書面ヒアリング（※）にて、具体的な事例収集を行った。

（※）原則、現地における取材を実施しているが、研修の実施者の意向等を踏まえ、現地におけるヒアリングの実施が困難である場合には、スポーツ庁及び研修の実施者との協議の上、研修の実施者への遠隔取材（オンラインヒアリングまたは書面ヒアリング）の対応を行った。

## (3)事例集の作成

（2）においてヒアリングを行った研修について、各事例を研修実施対象者の属性等を十分に整理・区分けした上で、必要な情報や説明等を網羅的に記載するとともに、写真やイラストなど視認性を十分に高めた事例集を作成した。

## (4)報告書及びサマリーの作成

（1）から（3）までの成果と、これらの成果を踏まえた今後の横展開の在り方について、報告書にまとめ、併せて、当該報告書のサマリーを作成した。

## 第2章 事例ヒアリング調査

### 1. ヒアリング調査概要

スポーツ庁と協議の上、積極的にハンドブックを活用した研修を実施した団体計 17 件に対し、ヒアリング調査を行った。

本章では、対象者へのヒアリング調査結果を基に事例として紹介する。ヒアリング対象は、下記の通り。

事例 01 岐阜県地域スポーツ課

事例 02 セントラルスポーツ株式会社

事例 03 公益財団法人横浜市スポーツ協会

事例 04 大阪府立障がい者交流促進センター（ファインプラザ大阪）

事例 05 東京都

公益社団法人東京都障害者スポーツ協会

事例 06 社会福祉法人大阪市障害者福祉・スポーツ協会

事例 07 茨城県教育委員会

事例 08 北九州市中学校保健体育科研究部会

事例 09 公益社団法人広島県パラスポーツ協会

事例 10 順天堂大学スポーツ健康科学部

事例 11 びわこ成蹊スポーツ大学

事例 12 日本福祉大学

事例 13 国際武道大学

事例 14 公益社団法人日本理学療法士協会

事例 15 順天堂大学大学院保健医療学研究科

事例 16 白蓮会館

事例 17 公益社団法人日本リハビリテーション医学会

## 2. ヒアリング調査結果

### 事例 01 岐阜県地域スポーツ課

#### 【研修参加者情報】

対象：スポーツ関係者・教育関係者・福祉関係者

参加者詳細：

特別支援学校の教員、小中学校の教員、県内の少年団の指導者、総合型地域スポーツクラブ指導者、県内スポーツ推進委員、部活の外部コーチ、放課後等デイサービススタッフ、民間企業、民間スポーツ指導者

#### 【研修情報】

##### ① 研修会の目的

- ・ 障害のある人が身近な地域でスポーツ活動に参加するためには、その受け皿となるスポーツ団体及び指導者の存在が不可欠である。岐阜県の現状として、スポーツをする場が少ないのが課題であった。
- ・ そこで、地域でスポーツ指導に携わる団体の職員や指導者を対象に、障害のある人のスポーツ指導に関する知識を深めていただき、一人でも多くの障害のある人がスポーツに親しむことができる体制を整備するため、令和6年度より本研修を開始した。

##### ② 研修プログラム

【第一部】講演：「地域に広げる！障害児・者と共に楽しむスポーツの環境づくり」  
(講師：兒玉友氏、伊藤則子氏)

【第二部】グループワーク (ハンドブック紹介)

- ・ 障害のある人へのスポーツ指導上の留意点
- ・ 誰もが楽しめるスポーツづくり

(※) 講師：日本福祉大学 スポーツ科学部スポーツ科学科 准教授 兒玉友氏

東京 2020 パラリンピック バドミントン女子ダブルス銅メダリスト 伊藤則子氏

##### ③ 研修内容

###### ○ 講演

- ・ パラスポーツの解説
- ・ スポーツ・イベント実施時における障害特性に応じた配慮例

###### ○ グループワーク

- ・ アイマスクを使ったアクティビティ (2人1組のペア)  
一方がアイマスクを着用し、指導者の動きを覚え、言葉だけで相手に伝える。  
→スポーツ指導や活動場面における、言葉がけの重要性とシンプルに伝える工夫を体験。
- ・ ハンドブックの紹介 (P12 (施設関連)、P20～ (障害への対応))

○ 誰もが楽しめるスポーツづくり

- ・ ボッチャ、バドミントンを用いた、誰もが楽しめるルール等の工夫  
→ボッチャではペットボトルやフープを活用し、バドミントンではコート of 広さや人数（3人1組など）を工夫して実施。

**【研修実施者、講師の声】**

- ・ 障害のある人にスポーツを教えたことがない人も、これを見たら教えられる。ストーリー性もあってよい。(研修実施者)
- ・ 特別支援学校の教員の立場でも勉強になる。紙で配るといいと思う。(研修実施者)
- ・ 全体像、ハンドブックの使い方、活用ポイントがありわかりやすい。数値も示しており、指導の入口で必要なことが書いてある。(講師)
- ・ 障害特性に応じた配慮についてしっかり書いてある。情報が網羅してあるのに内容がまとまっていてよい。(講師)
- ・ パワーポイントやイメージができるような動画（ショート動画）もあるとよい。(研修実施者、講師)

## 事例 02 セントラルスポーツ株式会社

### 【研修参加者情報】

対象：スポーツ関係者

参加者詳細：

スポーツクラブのインストラクター、スタッフ

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ セントラルスポーツ株式会社では、2022年に今回研修を行った稲毛海岸店を含む千葉県3店舗でパラ水泳教室を開講した。その後順調に利用者、参加者が増えていた中で、これまで障害のあるスクール生の指導に関わってきたインストラクターだけでなく、普段障害のあるスクール生の指導に関わっていないスタッフも含め全体に対し、パラ水泳教室の趣旨や、パラスポーツの理解を深めてもらう目的でハンドブックを使った研修を実施した。
- ・ 研修は、稲毛海岸店の全体ミーティングの場を活用して実施した。ハンドブックは研修参加者だけでなく、一定の部数を店舗に置いて、参加できなかったスタッフも含め全員が閲覧できるようにした。

#### ② 研修プログラム

- ・ 同社のパラ水泳教室立ち上げの経緯を説明
- ・ 稲毛海岸店のパラ水泳教室インストラクターによる説明（指導するうえで日頃気を付けている点等）
- ・ 講義（★ハンドブック活用） ※ディスカッション、質疑応答あり

(※) 講師：セントラルスポーツ株式会社 営業企画部 平山 智志 氏

#### ③ 研修内容

- ・ 日頃の業務の中でパラ水泳教室を見たことがないスタッフもいたため、まずはじめに、会社としてのパラ水泳教室立ち上げの経緯を説明した。
- ・ 現在パラ水泳指導をしている3人のインストラクターが、実際の指導や、気を付けていること、障害のない人のスクールとの違いについて説明した。

<ハンドブック活用>

- ・ 参加者にパラ水泳教室の理解を深めてもらうため、ハンドブックを全員の手元に配り、ハンドブックの内容に沿って説明した。説明箇所は、主に第3章の「障害のある方へのスポーツ指導の実践」とした。普段障害のある人の指導に関わっている人も多く、興味のある人が多いのでディスカッションや質疑応答を入れて研修を進めた。
- ・ パラ水泳教室は知的障害、発達障害の子ども（主に幼児～小学生）を対象にしているため、参加スタッフにはハンドブックの第3章のうち P.26（知的障害・発達障害）を軸に話した。例えば知的障害と言っても、障害者手帳の有無、同じ障害種にも色々な種類

(発達障害であれば自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習症など)があるということを、研修によって知識を整理できた。

### **【研修実施者の声】**

- 実際にスポーツ指導に関わっているスタッフにとって、スポーツ指導の実践を軸にポイントが整理されていたので、実際の指導と合わせて注意すべき点がイメージしやすかった。
- ハンドブックに書いてある指導のポイント（粘り強く指導する、スモールステップを意識するなど）は、障害のない子どもへの指導とも共通するため、障害の有無に関わらず、指導者が学ぶべき重要なポイントがまとめられている。

## 事例 03 公益財団法人 横浜市スポーツ協会

### 【研修参加者情報】

対象：スポーツ関係者・医療関係者

参加者詳細：

スポーツ施設部に所属する職員、スポーツ医科学センターに所属する職員、指導に携わる職員

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 横浜市スポーツ協会では、管理施設において、ノーマライゼーションに関する研修を実施しているが、施設により内容にばらつきがあった。横浜市スポーツ協会職員が、スポーツ庁が作成したハンドブックを知ったことをきっかけに全体研修として、障害のある人へのスポーツ指導・関わり方について、グループワーク形式の研修を行った。
- ・ 本研修では、ハンドブックを活用することにより、スポーツを実施する方の特徴を踏まえた多様な指導方法の習得や、インクルーシブなスポーツの実施環境の整備に繋がる他、運動の苦手な方への指導や、子ども・高齢者への指導等、指導の対象や範囲の拡大を目的としている。

#### ② 研修プログラム

- ・ 講義（★ハンドブック活用）
- ・ グループディスカッション
- ・ アイスブレイク（ロールプレイ）
- ・ 発表及び講師によるフィードバック

(※) 講師：順天堂大学 保健医療学部 理学療法学科 同大学院保健医療学研究科 理学療法学専攻 教授 相澤 純也 氏

(公財) 横浜市スポーツ協会 ウェルネスプロモーション課 吉元 麻友美 氏

#### ③ 研修内容

- ・ 講義では、ハンドブックを基に、障害のある人へのスポーツ指導・関わり方に関する基本を解説。
- ・ グループディスカッションでは、業務の中で「障害のある人への対応で苦慮したこと」について発表し、ハンドブックを参考にしながら、その対応の仕方を議論した。(1グループ5名、6グループ)
- ・ 最後には、各グループの議論の結果を発表・共有し、講師からフィードバックを行った。
- ・ 途中、アイスブレイクとして、障害のある人へのスポーツ指導についてのロールプレイを行った。

＜ハンドブックを活用したディスカッション例＞

- ①障害のある人への対応で苦慮したことやエピソードを1人ずつ発表・共有
- ②グループで話し合うテーマを1つ決める
- ③求められるべき対応やよりよい対応・対策などハンドブックを活用して深堀
- ④内容をまとめて1グループずつ発表

### 【研修実施者の声】

- ・ 通常のディスカッション研修では、困っていることの共有はできても、その解決策を考えてもらうためには解決策の情報・材料を提供する必要があり、講師は事前の準備に多くの時間を要する。今回の研修は、ハンドブックを活用することで、参加者が日頃の指導において困っていることに対してどう対応すればいいかといった解決策までを考える機会となった。また、ハンドブックがあるので、講師を含めた研修実施者側の準備時間の短縮につながった。
- ・ ハンドブックは、ベーシックな部分がまとまったテキストになっている。これまで、基本がまとまった教材がなかったので初心者向けの研修の教材としても使いやすい。

## 事例 04 大阪府立障がい者交流促進センター（ファインプラザ大阪）

### 【研修参加者情報】

対象：教育関係者

参加者詳細：

大阪府内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 当研修は学校教員を対象とし、毎年実施している。教員にパラスポーツを知ってもらうと共に、教員を通じて児童生徒にもパラスポーツを知ってもらうことを目的としている。
- ・ パラスポーツの認知度は高まっているが、パラリンピックなど競技スポーツのイメージが強い。パラスポーツがあることは知っていても、自分とはかけ離れたものというイメージがあると、どうやって始めたらいいかということまで考えがいかなくなってしまう。競技だけではなく、パラスポーツにも色々なスポーツがあること、パラスポーツは、誰でもできるものだということを児童生徒達に知ってもらいたい、と考えており、今回の研修を企画している。

#### ② 研修プログラム

- ・ パラスポーツ指導上の留意点（★ハンドブック活用）
- ・ 手話講習
- ・ アイスブレイク（ロールプレイ）
- ・ 実技体験（車いすバスケットボール・フライングディスク・シッティングバレーボール・ボッチャ）

(※) 講師：大阪府立稲スポーツセンター・大阪府立障がい者交流促進センター職員  
(日本パラスポーツ協会公認 パラスポーツ指導者)

#### ③ 研修内容

- ・ 午前は講義、午後は実技という構成で実施。
- ・ 講義の「パラスポーツ指導上の留意点」においてハンドブックを活用。ハンドブックの構成に沿って、写真や実例を交えて解説した。

<ハンドブック活用>

- ・ 第三章では、それぞれの障害種別について、実例を挙げながらわかりやすく説明を行った。

【視覚障害】バスケットボールをした例を紹介。何色が見えるか確認し、少し見える「青色」のカラーコーンでガイドをすることにより、ゴール体験ができた。(ハンドブック P20、21)

**【知的障害・発達障害】** 発達性強調運動障害により、スポーツに消極的になるケースも多い。小さな成功体験を積んでもらうことが重要。情報を簡潔に伝え、活動の様子を見て理解しているか確認する。(ハンドブック P26、27)

### **【研修実施者の声】**

- ハンドブックは、パラスポーツ指導の基本的なことが書かれている。初心者向けとして学ぶべき内容が掲載してある。
- 全ての障害が、キーワードを漏らさず広く紹介されていることが良い。講義も、ハンドブックに沿って網羅的な内容とした。これまでの教員向け研修では触れなかった精神障害や視覚障害などについても紹介することができた。
- コミュニケーションの重要性に触れていることが良い。また、全体的にパラスポーツが身近に感じられるように構成され、一つ一つの項目が理解しやすいように細かく紹介されている。

## 事例 05 東京都／公益社団法人東京都障害者スポーツ協会

### 【研修参加者情報】

対象：教育関係者

参加者詳細：

東京都内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教職員及び指導員等

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 東京都と公益社団法人東京都障害者スポーツ協会との共催により、区市町村職員や教職員等を対象に、パラスポーツ事業実施のきっかけづくりや好事例の共有・普及を図り、より身近な地域においてパラスポーツ事業を企画立案・実施する人材を育成する「東京都パラスポーツセミナー」を、対象者別に年4回開催している。
- ・ 本研修は、障害のある子どもがパラスポーツに親しむためのキーパーソンである教職員等を対象に、障害特性に応じた運動・スポーツの指導に役立つ知識・ノウハウや障害のある生徒とない生徒と一緒に参加できる体育授業等の実践方法等を学ぶ機会として開催した。

#### ② 研修プログラム

- ・ 【講演】パラスポーツの振興（★ハンドブック活用）
- ・ 【事例紹介】障害特性に応じた運動・スポーツ支援の工夫に係る事例紹介
- ・ 意見交換会
- ・ 【情報提供】東京都におけるパラスポーツ振興について
- ・ 【施設見学】東京都障害者総合スポーツセンター

(※) 講師：【講演】スポーツ庁 健康スポーツ課 専門職 見供 翔氏

【事例紹介】順天堂大学 スポーツ健康科学部 准教授 村上 祐介氏

#### ③ 研修内容

- ・ 講演ではハンドブックの構成に沿って、障害のある人のスポーツ参加に関する課題や、指導者のマインドセット、配慮のポイント等を紹介。特に、障害のある人がスポーツに参加しづらい背景や、子どもの頃の運動経験が将来のスポーツ実施率に影響することなど、教育現場にも通じる視点を示した。
- ・ ハンドブックの活用方法について紹介した。初めて障害のある子どもと関わる方は、教材の一つとして参照したり、生徒への理解がしやすくなったり、個別対応のヒント等を得ることができる。障害のある子どもと関わる機会が多い方は、職員研修の教材として活用したり、校内の支援体制づくり等の参考になる。  
また、団体の場合は、定期的で開催される勉強会や研修会で教材の一つとして活用できる。ハンドブックをこのように活用することによって、共通理解、支援の質の向上につながる。

### **【研修実施者の声】**

- 今回の研修は、障害のある人へのスポーツ指導に関する基礎的な理解を深める貴重な機会となり、ハンドブックを通じて指導者としての心構えや障害種の特性に応じた配慮の重要性を学ぶことができたことは大きな成果と捉えている。
- ハンドブックは、技術面だけでなく、コミュニケーションの重要性など、障害のある人に関わる姿勢に焦点を当てている点も印象的。障害のある人との関係づくりにおいて重要な視点だと感じた。

## 事例 06 社会福祉法人大阪市障害者福祉・スポーツ協会

### 【研修参加者情報】

対象：教育関係者

参加者詳細：

大阪市内の小学校・中学校・高等学校・支援学校の教員

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 次の目的をもって実施

- ① 体育の授業でパラスポーツをどう扱えばよいかわからないという教員の参考にしてもらうため
- ② 障害のある児童・生徒が卒業後にスポーツに取り組む場所があることを教員に周知するため
- ③ 毎年5月に開いている大阪市障がい者スポーツ大会の広報・周知のため

平成 28 年度（2016 年度）、学習指導要領でオリンピック・パラリンピック教育の重要性が盛り込まれることになったことを踏まえ、平成 29 年度（2017 年度）から研修を開始（大阪市委託事業）

#### ② 研修プログラム

- ・ ガイダンス
- ・ 講義（パラスポーツの概要や地域で活用できる資源の紹介など）
- ・ 施設見学《大阪市長居障がい者スポーツセンター》（利用方法の案内を含む）
- ・ 【パラスポーツ体験（学校における体験学習での導入事例など）

(※) 講師：【講演】大阪市障害者福祉・スポーツ協会

【パラスポーツ体験】シッティングバレーボール…嵯峨根 望 氏

ボッチャ…曾根 裕二 氏

#### ③ 研修内容

- 講義

- ・ ハンドブックについて紹介し、3章構成（パラスポーツの基本、スポーツ指導の入り口、スポーツ指導の実践）であること、障害のある人のスポーツ実施率等の現状や目標数値、障害ごとの指導方法等について記載していることを説明した。
- ・ センター指導員による学校での体験学習の支援、生徒のスポーツ活動の充実（競技用車いすの体験）、特別支援学級との交流、パラスポーツ用具の貸出など、現場で活用できる資源の紹介を行った。

- パラスポーツ体験

- ・ パラスポーツ体験では、講師の指導のもと、シッティングバレーとボッチャを体験した。
- ・ ルール説明と練習の後、チームに分かれて試合を行った。講師からは、実際の授業における指導の工夫点がわかりやすく説明された。

### **【研修実施者の声】**

- ・ 受講者には特別支援学校や特別支援学級の教員が多く、担当する生徒の課題への対応について問題意識をもって取り組んでおられます。ハンドブックを通じて、様々な障害の対応に視野を広げるとともに、教員同士が各々の課題認識を共有することを通して、障害のある生徒との関わりについて理解をさらに深めることができましたと感じます。
- ・ ハンドブックには当事者の声も記載されており、大変参考になります。

## 事例 07 茨城県教育委員会

### 【研修参加者情報】

対象：教育関係者

参加者詳細：

茨城県内の国公私立小学校・義務教育学校前期の体育担当教員

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 茨城県教育委員会では、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有できるよう、共生の視点を踏まえた授業づくりを実践することを目的として、学校体育実技講習会を毎年開催している。
- ・ 令和7年度は、13の講習会を開催し、授業担当者の資質向上と指導力向上を図った。13の講座を担当する講師は、「令和7年度体育保健体育指導力向上研修」に参加した教員に加え、大学教員等に講師を依頼した。
- ・ その中の一つの講習会において、体育が苦手な児童に体育が好きになる授業づくりを学ぶためには、アダプテッド・スポーツの考え方を活用することも方法の一つとして考え、齋藤氏（筑波大学、教授）に講師を依頼し、講習会の実施に至った（アダプテッド・スポーツの講座は今年度初めて設定）。

#### ② 研修プログラム

- ・ 講義（アダプテッド・スポーツの説明など）
- ・ 実技（準備運動編）
- ・ 実技（主運動編「小学校体育科（第5学年及び第6学年のボール運動：ゴール型）
- ・ まとめ・質疑応答

(※) 講師：筑波大学 体育系 教授 齋藤 まゆみ 氏

#### ③ 研修内容

##### ○ 講義

- ・ 講座では、アダプテッド・スポーツについて、またインクルーシブ体育を実践するための考え方を、事例を交えて解説した。

##### ○ 実技

- ・ 受講生を10グループに編成し、各グループで、児童がスポーツをする際にぶつかる困難、その困難を解消するための工夫、みんなで楽しめるようにする工夫など、以下の3つのテーマについてグループワークを行った。

テーマ1：児童が「パスを出す・ドリブルをする」ときの難しさ・困り感（バリア）を考える。

テーマ2：児童のニーズに合わせて用具やルールの工夫を考える（さまざまな大きさや

形のボールを使用、視界を遮るゴーグルを着用など)。

テーマ3：簡易ゲームを考案（楽しさやチームとしての一体感を感じるためには、どんな工夫をすればよいかなど）。

- ・ ディスカッションをする際の参考としてハンドブックの URL を掲載し、障害に対する知識やその指導のポイント・コツを受講者が参照した。

#### **【研修実施者の声】**

- ・ 本研修会を通じて、受講者である教員たちは、児童が直面する課題について考えることができた。
- ・ また、課題に応じた手立て（人、もの、場所、ルールなどの変更や修正）を検討し、誰もが楽しめる簡易ゲームを考案する過程を通じて、体育が苦手な児童にも配慮した授業づくりの視点や工夫を見出すことができた。
- ・ 本講習会で学んだ「アダプテッド・スポーツの考え方」の活用することで、体育が苦手な児童を含めたすべての児童にとって体育が好きになるような授業実践ができるようになることを期待できる。

## 事例 08 北九州市中学校保健体育科研究部会

### 【研修参加者情報】

対象：教育関係者

参加者詳細：

北九州市中学校保健体育科教員

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 北九州市保健体育科研究部会では、毎年夏休みに伝達講習会を実施している。その中で、本年度は、「障がいのある方へのスポーツ指導の関わり方」について学び、それを踏まえて、日頃の保健体育の授業を見直し今後に生かしていくことで、生徒とのかかわり方や、きめ細やかな配慮等を行うことができるようにすることを目指し、実施した。
- ・ 障害にも様々な種類があり、それぞれに応じた配慮が必要であることを、ハンドブックを通じて現場の教員に伝えることが重要であると考えている。

#### ② 研修プログラム

- ・ 講話「障がいのある方へのスポーツ指導の関わり方」（★ハンドブック活用）
- ・ 伝達講習（ダンス、柔道）
- ・ 振り返り

(※) 講師：北九州市 教育委員会事務局学校教育課 学校教育課 主任指導主事 瀧口 明 氏

#### ③ 研修内容

- ・ 今回の研修は、障害の有無に関わらず、スポーツを実施する人の特徴を踏まえ多様な指導方法の習得することの重要性や、そうすることで能力開発の貢献に資するとともに、インクルーシブなスポーツ環境の整備につながるということが説明された。

<ハンドブック活用>

- ・ 講話では、ハンドブックに沿って主に知的障害、発達障害のある人のスポーツ指導について紹介した。楽しく運動をする方法や生徒への関わり方、声のかけ方などについて学んだ。
- ・ きめ細やかな指導のポイントなど、参加者は新たな視点でインプットをしていた。

#### 【主な活用部分】

- ・ 指導する際の心構え、スポーツを実施するための環境整備・工夫（P10～13）
- ・ 知的障害・発達障害（P26、27）

### 【研修実施者の声】

- ・ 今回の研修は、各障害種の特徴を踏まえた指導対応方法を具体的にまとめている資料だったので、障害の有無に関わらず、スポーツを実施する人の特徴を踏まえ多様な指導方法の習得や、能力開発の貢献に資するとともにインクルーシブなスポーツ環境の整備につながることを期待される。
- ・ 障害の有無やその他の違いに関わらず、すべての子ども達と同じ場所で共に学び、互いに尊重し支え合い、多様性を認めあえることができる教育を実現できるようにする。

## 事例 09 公益社団法人広島県パラスポーツ協会

### 【研修参加者情報】

対象：学生

参加者詳細：

主に広島県内のパラスポーツ・ボランティアに関心がある学生、パラスポーツに関わる学生団体、医療・福祉に関わる学生

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 広島県内には、アダプテッドスポーツクラブ（ASC）等、パラスポーツに関わる学生サークルが5団体ある。広島県パラスポーツ協会ではその状況に着目し、ボランティアを育成する上で学生を巻き込んだ事業を開催したいと考え、学生の主体的なパラスポーツ振興につなげることを目的とした交流会が生まれた。令和7年度で3回目の実施となる。
- ・ 交流会ではパラスポーツを実際に体験する時間を設けたいと考え、広島県ボッチャ協会に協力を依頼した。ボッチャ協会側も、審判の育成のため、講習会を開催したいという思いがあったため、交流会と審判講習会の同時開催が実現。

#### ② 研修プログラム

- ・ 【第一部】パラスポーツ講話「今日を楽しむ」
- ・ 【第二部】ボッチャ審判講習会（主催：一般社団法人広島県ボッチャ協会）
- ・ 【第三部】ワークショップ「ボッチャの入り口、広げよう」

(※) 講師：堀江車輛電装株式会社 中村 哲郎 氏

#### ③ 研修内容

##### ○ 講演

- ・ 堀江車輛電装株式会社 中村 哲郎 氏より、ボランティアから仕事にした経緯や、パラスポーツに対する想いについて講話。
- ・ 講話後は学生同士でグループワーク、発表を行った。

##### ○ ボッチャ審判講習会

- ・ 広島県ボッチャ協会指導の下、コートづくりやボッチャの基礎的なルール、審判の専門的な知識を学んだ。

##### ○ ワークショップ

- ・ 〈する・みる・ささえる〉の視点から、ボッチャに関わる仲間を増やすためのアイデアをグループで考え、発表した。
- ・ 交流会の終わりに、ハンドブックの紹介を行った。

### 【研修実施者の声】

- 手に取りやすく読みやすい内容でありながら、医学的要素も含まれていて読みごたえがある。
- パラスポーツ指導をするしないに関わらず、パラスポーツを一緒にやりたいと思った時に、ポイントがわかりやすい。これからパラスポーツに関わる、関わってみたい方々にぜひハンドブックを見てもらいたい。
- 地域のスポーツ指導員の研修の中で、ハンドブックをより効率的に活用できる機会があるのではないかと考えている。参加者はある程度の知識はあるが、特にパラスポーツの場合の具体的に注意すべきポイントを確認してもらうのに、このハンドブックはとてもよい。

## 事例 10 順天堂大学 スポーツ健康科学部

### 【研修参加者情報】

対象：学生

参加者詳細：

順天堂大学スポーツ健康科学部 1 年生

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 順天堂大学スポーツ健康科学部では、「体づくり運動」という授業で、「障害のある子どもに合わせた運動とは」というテーマで、座学から実技を実施。
- ・ 受講する学生の多くは、パラスポーツに触れる機会・経験がほとんどなく、初めてパラスポーツを学ぶという人が多い。
- ・ この授業を通じてスポーツ実施者の障害特性に合わせて工夫するというアダプテッドの視点が重要であるということを学生に学んでもらうことを目的にオンライン講義と実技を実施した。

#### ② 研修プログラム

- ・ オンライン授業（★ハンドブックを活用）

【課題】①知的障害のある児童生徒を想定し、みんなが参加できる「おにごっこ」を考えよう！！

②肢体不自由のある児童生徒を想定し、新しい新体力テスト（スポーツテスト）を考えよう！

- ・ 実技授業（ボッチャ）（★ハンドブックを活用）：  
誰でも楽しめる、障害特性に合わせたボッチャ体験

(※) 講師：順天堂大学スポーツ健康科学部 准教授 村上 祐介 氏

#### ③ 研修内容

- ・ 各種障害の特徴の理解を深めるため、講義部分だけではなく実技授業での振り返りにも、ハンドブックを活用した。

<ハンドブック活用>

- ・ オンライン授業：P.26、27 知的障害・発達障害  
知的障害や発達障害のある子どもに対して指導する際に想定される状況や指導のポイントの説明をするために、ハンドブックを活用した。
- ・ 実技授業：P.10 スポーツを指導する際の心構え  
運動指導をする場面の導入として、対象の人が一緒に楽しむにはどうすればよいか、というマインドを持ち一緒に考えることの重要性を説明。加えて、安全に配慮して行うということ、コミュニケーションをしっかりとること、などを説明。

#### <ボッチャ体験での学生のアイデアの一例>

目が見えない人と一緒にボッチャをする際に、全員で後ろを向き、見えないようにする方法を学生自身が提案、実施した。また肢体不自由で遠くにボールが投げられない子どもに対しては、手もとにあったノートや長椅子などを活用してボールを転がすための教材を考案した。

#### 【研修実施者の声】

- ・ 授業でハンドブックを学生に実際に使うことで、指導する側にとってもわかりやすく感じられた。
- ・ 特別支援教育に関する他の授業などで知識を学ぶときに、各障害種の説明部分は活用しやすい。体育の実技やスポーツだけでなく、特別支援学校の教員養成の導入にも使える。
- ・ ハンドブックを持っておくと、わからないことがあればいつでも振り返れるので、学生の今後の活動でも活用できるいいツールである。特に実習などで教育現場に行った後にハンドブックを振り返りとして使うと、経験で得た知識をさらに定着させられるのでよいと思う。

## 事例 11 びわこ成蹊スポーツ大学

### 【研修参加者情報】

対象：学生

参加者詳細：

びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部スポーツ学科2年生

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ びわこ成蹊スポーツ大学では、令和7年度滋賀県開催の全国障害者スポーツ大会（全スポ）に選手団サポーターとして学部生約300名が参加。
- ・ 大会に向けてのガイダンスを必修授業である「スポーツフィールドワークⅠ」で行い、普段障害のある人とあまり接点がない学生が、障害に対する基本的な学びを得るとともに、学んだことを実際の現場で活かすことができるよう、現場経験の豊富な大阪市長居障がい者スポーツセンター 福嶋尊史氏に外部講師を依頼した。
- ・ 学生が一番学ぶべきポイントを「コミュニケーション」と位置づけ、講義ではハンドブックを活用するとともに、視覚障害のある人への説明を体験する模擬演習といったグループワークを取り入れた。

#### ② 研修プログラム

- ・ 講義（大阪市長居障がい者スポーツセンター 福嶋 尊史 氏）（★ハンドブック活用）
- ・ グループワーク（視覚障害のある人への説明を体験する模擬演習を含む）
- ・ まとめ

(※) 講師：びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ政策・文化コース 主任/准教授 中道 莉央 氏  
大阪市長居障がい者スポーツセンター 福嶋 尊史 氏

#### ③ 研修内容

- ・ 選手団サポートとして、各障害に必要なコミュニケーションを説明。
- ・ テーマは障害の理解とコミュニケーションの2つ。参加する障害種別の特性を踏まえたコミュニケーションのポイントについて実技を交えながら講義を行った。

<ハンドブック活用>

- ・ 障害種別ごとにスポーツ指導、関わり方のアドバイス等の説明を行った（P18～P29）。

【グループワークの一例】「お弁当が届きました」（視覚障害）

2～3人のグループで、見える役と見えない役に分かれ、実際の障スポのお弁当の写真を使用し、見える役の人が、お弁当の中身と位置関係を見えない役の人に伝える。

→教示例) おかずが9つの仕切りで分けられている。手前に佃煮があり、時計回りに何が入っているか(何かを基準に)伝える。箸で触りながら理解していく。

### 【研修実施者の声】

- ハンドブックのP10～P14には指導する際の「心構え」についてなど、とても大事なことが書かれてある。他のテキストには、こうした指導者の「心構え」については意外と触れられていない。パラスポーツに関わる人は、障害やスポーツに関する知識を幅広く持ち、さらに倫理観も求められる。このハンドブックには、現場ですぐに使えるハウツーと、指導者や支援者として障害のある人に関わる際の理念や心構えの重要性を学ぶことができる内容が盛り込まれている。
- 後期からのパラスポーツ指導を模擬的に実践する授業でも、ハンドブックが役立ちそうだと考えている。

## 事例 12 日本福祉大学

### 【研修参加者情報】

対象：学生

参加者詳細：

藤田紀昭研究室ゼミ学生（日本福祉大学スポーツ科学部 スポーツ科学科3年生）

※実技授業（詳細下記）については日本福祉大学スポーツ科学部 スポーツ科学科の2～3年生を対象

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 藤田研究室のゼミでは、3年生の後期に、発達障害・知的障害のある児童に対して学生が指導プログラム（レクリエーション）を作成し、実践している。その準備段階で、障害に対する理解をより深めるため、前期に障害に対する基本的な知識から指導法までを広く学び、その内容を復習する際にハンドブックを活用した。
- ・ また、日本福祉大学では上記ゼミのほか、各競技の指導法の実技授業（バドミントン、水泳）において、障害のある人がいるときの対応・指導の方法について学習するために、ハンドブックを活用した授業を実施した（各授業1コマ実施）

#### ② 研修プログラム

【藤田研究室のゼミ】

- ・ 前期授業：発達障害・知的障害の児童への指導方法を一通り指導
- ・ 夏季合宿：前期授業内容の振り返りと、後期の指導プログラムの実施に向けた準備（★ハンドブックを活用）
- ・ 後期授業：プログラム指導案の作成、実践、振り返り

(※) 講師：日本福祉大学スポーツ科学部 スポーツ科学科 教授 藤田 紀昭 氏

※スポーツ指導法演習（バドミントン）：同学科 准教授 兒玉 友 氏

※スポーツ指導法演習（水泳・水中運動）：同学科 講師 坂口 結子 氏

#### ③ 研修内容

- ・ ゼミ合宿の冒頭に約1時間、ハンドブックを使った講義を実施。
- ・ ゼミ学生は、これまで障害のある人と接した経験はほとんどなく、指導案を作る～提供するところで初めて障害のある人に接する人が多い。最初は人前で話すのも難しい学生もいたが、輪に入れない子どもへの声掛けをどうするか、わかりやすく説明するために具体的な視覚情報を示すようにする、など授業やハンドブックで得た知識をプログラム実践の際に大いに活用できた。

### <ハンドブック活用>

- ・ 3章の知的障害・発達障害（P.26～）のある方へのスポーツ指導を中心に活用した。

#### 【プログラムについて】

- ・ 知的障害・発達障害の児童（小学生）を対象に4回（9～12月の毎月1回、土曜日）実施、毎回7～8名の児童が参加。
- ・ プログラムは、挨拶のあと導入としてゲームやダンスをしてからレクリエーションを行う（フラフープや風船などを使用）。最後はパラシュート（直径5～7mの大きな円形の布）を使い皆でダンスして終了（約1時間）。

#### 【研修実施者の声】

- ・ ハンドブックは様々な使い方が出来る。例えば一般のスポーツクラブ（地域のスポーツクラブ）にハンドブックを1冊でも置いておくことで、障害のある人が来た際の対応について、いつでも誰でも参考にできる。
- ・ 競技の指導者についても、日本スポーツ協会の公認スポーツ指導者の養成プログラムの中にハンドブックを解説する時間を設けるなど、広く様々なスポーツ指導者養成の時にも使ってもらおうとよいのではないか。

## 事例 13 国際武道大学

### 【研修参加者情報】

対象：学生

参加者詳細：

「障がい者武道論」履修の国際武道大学体育学部学生（1年生）

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 授業「障がい者武道論」では、障害のある人への武道・スポーツ指導法の考察・開発、また、武道の現代的意義の一面を理解し、他者に伝えることができるようになることを到達目標としている。
- ・ 本ハンドブックの内容を通じて障害のある人へのスポーツ指導についての知識をより深めてもらう導入として、ハンドブックを活用して授業を実施することとした。

#### ② 研修プログラム

- ・ 講義（★ハンドブック活用）
- ・ 実技授業（障害のある人も障害のない人も一緒に楽しめる運動の体験）

(※) 講師：国際武道大学 学長 松井 完太郎 氏

#### ③ 研修内容

- ・ 学生 120 名が出席。アリーナで行われた実習授業では、柔道の帯で身体拘束した状態で準備運動したりと、様々な準備運動を障害のある人も障害のない人も一緒に楽しむことができるような内容で実施。

<ハンドブック活用>

- ・ 障害のある人へのスポーツ指導のメリット（P.14）を中心に活用した。松井氏の経験等を含めたいくつかの事例を通じて、障害のある人への指導法は初心者、高齢者、運動が苦手な人などの指導にも有効であることが多いことを学生に伝えた。

【富山県の特別支援学校での空手指導の事例を紹介】

- ・ 例えば空手の正拳突きは左右の腕を交互に回旋させて突くが、動きを分解して説明指導すると、知的障害がある生徒は混乱しやすい。富山県の特別支援学校では、左右の腕を交互に回旋させながら徐々に腕を左右に揺らし、段階を間に挟むことで、短時間で正拳突きを習得させている。この方法は障害のある人への指導だけでなく障害のない人への指導にも応用できる。

### 【研修実施者の声】

- ・ ハンドブックはちょうどいい量にまとめられている。いかに削るかすごく難しい。よく

ここまで絶妙なバランスでエッセンスを残して作成してくれたと思う。また、選手のインタビューがあるが、こういうところから入ると入りやすくていい。二次元コードもあって使いやすい。

- P.14 は障害のある人側のメリットではなく、指導者側のメリットについて言及している。これはとても重要なことである。
- 障害のある人への指導で得られる気づきや工夫は、スポーツ初心者への指導にも応用できる。何より重要なのは、指導者と受講者の双方がスポーツを楽しむ姿勢を持つことであり、本ハンドブックは、そのような指導者としてのマインドセットを学ぶための一助となる。
- 同じ障害でも一人ひとりの状態や背景が異なるため、指導者が本人や、その家族と丁寧にコミュニケーションをとって理解を深めることが大切であり、本ハンドブックは、そうした情報をもとに個々に合った指導のポイントを整理し、実践につなげる手助けとなる。

## 事例 14 公益社団法人日本理学療法士協会

### 【研修参加者情報】

対象：その他（一般の方）・学生

参加者詳細：

杏林大学近隣在住のボッチャ愛好家の一般シニア、杏林大学ボッチャ部学生

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 講師である一場氏は杏林大学ボッチャ部監督でもあり、地域を含めたボッチャの普及に取り組んでいる。杏林大学周辺ではボッチャが普及し地域で定期的にボッチャを行っているシニアの方が多いことから、シニアの方々と同大学の学生双方を対象とした研修会の実施を検討した。
- ・ 地域でパラスポーツを実践しているシニアの方々を対象とした講義形式の研修会と障害のある人を模してのボッチャ競技体験や、シニアの方々と杏林大学ボッチャ部学生との世代を超えた交流を通じ、パラスポーツの魅力の再発見を図ることを目的として、本研修会を実施した。

#### ② 研修プログラム

- ・ 講義（★ハンドブック活用）
- ・ 車いす使用など障害のある人を模してのパラスポーツボッチャ体験
- ・ ボッチャを通じた世代間交流（ボッチャ交流戦）

(※) 講師：杏林大学 保健学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻 准教授 一場 友実氏

#### ③研修内容

- ・ 講義ではハンドブックを配布し、ハンドブックの内容を盛り込んだスライドを用いて説明。スライドの中には、ハンドブックの内容に加えて、ボッチャのシニアへの有用性について一場氏の研究結果も含めた。
- ・ スライド説明後、研修会の内容である「障害のある方へのスポーツ指導・関わり方」を生かしていくために、まず障害のある人がスポーツを実施する際に、どのようなところに不便を感じ、手伝ってほしいか、などを理解するため、車いすを使用して、障害のある人を模したボッチャ体験を行った。
- ・ ボッチャ体験の後、世代間交流としてボッチャ交流戦を実施した。（シニア3名と学生1名で1チーム）

<ハンドブック活用>

- ・ 第三章 障害のある方へのスポーツ指導の実践

### 【車いす乗車体験】

- ・ 全員が車いすに乗車し、自身で操作しながらボッチャを行った。操作が難しい場合には学生が補助した。参加した方々は、この疑似体験を通じて、障害のある人の目線や立場に立ち、どのような課題があり対応が必要か、等を実感する機会となった。

### 【研修実施者の声】

- ・ 「障害のある人に対してどのように接してよいか、手助けしたらよいかわからない」というシニアの方々が、ハンドブックに記載されている話を聞いたり、車いす乗車体験により、対応の仕方を学び、さらには実践でき、今回の研修会はその導入として大変良い機会になった。
- ・ 医療従事者ではない方、障害のある人と交流の機会が少ない方向けに、このハンドブックの前段階として、ハンドブック簡易版があってもよいかと考える。

## 事例 15 順天堂大学大学院 保健医療学研究科

### 【研修参加者情報】

対象：学生・医療関係者

参加者詳細：

相澤純也研究室ゼミ所属の修士課程生、博士課程生

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 大学院にはリーダー養成機関という役割もあるため、学生には広い知見や視野で、特にパラスポーツやインクルーシブ教育、障害を持った方々についての知見を深める必要がある。相澤教授は本ハンドブック作成に検討委員会委員として携わっており、数多くいる健康医療福祉関連職種の大学院生に対しての横展開モデルになるように、ゼミの授業でハンドブックを取り扱うこととした。
- ・ 今回の授業は、理学療法士国家資格を有する大学院生に対して、ハンドブックの内容、実用性、有用性などについて、対教員・学生間で質疑応答、ディスカッションをしながらハンドブックへの親和性や理解度を高めてもらうためのものである。

#### ② 研修プログラム

- ・ 導入（★ハンドブック活用）
- ・ ディスカッション（意見交換）
- ・ アンケート配付

(※) 講師：順天堂大学 保健医療学部 理学療法学科 同大学院保健医療学研究科 理学療法  
学専攻 教授 相澤 純也 氏

#### ③ 研修内容

- ・ 受講者は全員理学療法士有資格者であり、障害に関する知識を有している。社会人学生であり、実際に障害のある人に対して支援をしている人もいる。今回はそうした、すでに知識を持つ層への研修となる。
- ・ 障害に関する知識は既にあるため、それをスポーツ指導につなげるきっかけにする、あるいは人脈の中で話すきっかけを作ることを目指す。

<ハンドブック活用>

- ・ 相澤教授がピックアップしたページについて簡単に説明した後、受講者が各トピック 2、3名ずつ、感じたことについてコメントしていく形式で実施した。

#### 【主なトピック例】

- ・ 目的について
- ・ 疑似体験について

- ・ 視覚障害について
- ・ 知的発達について
- ・ 障害のある人が教えることについての波及性

### **【研修実施者の声】**

- ・ 内容がベーシックなので、大学1年生から4年生まで読解でき親和性が非常に高い。入門書として1年生から活用できるイメージ。コラムもあり 30～40 分くらいで使いやすい浅広さである。多くの専門家が作成に関わっている。
- ・ 受講者の目線・立場に合った欲しい情報についてディスカッションできるよう、「この情報をあなたならどう使うか、周囲の人にどう使ってもらうか」という投げかけで深掘りすると、当事者意識が高まり、印象に残って、ハンドブックの有用性が身に染みて「機会があれば使ってみよう」と、波及していくのではないかと。

## 事例 16 白蓮会館

### 【研修参加者情報】

対象：福祉関係者

参加者詳細：

多機能型拠点いーはとーぶ（児童発達支援、放課後等デイサービス、生活介護）の職員、重症児ダイルーム AQUA（児童発達支援（重心）、放デイ）の職員

### 【研修情報】

#### ① 研修会の目的

- ・ 障害のある人が運動・スポーツを実施するにあたっては、障害の有無に関わらず、指導者が運動・スポーツを実施する方の特徴を踏まえた多様な指導方法を習得することが必要となる。
- ・ これまで障害のある子ども向けの空手教室を実施している中で、指導者に対して伝えていなかったスポーツ指導法などについて、現場の職員に説明したいと考えていた。
- ・ そうした中で、指導者としてのマインドセットや指導対象の特徴を踏まえた指導のポイントやコツをまとめたハンドブックが良い教材になると考え、研修を実施した。

#### ② 研修プログラム

- ・ 児童発達支援、放課後デイサービスの職員が参集する職場会議（終了後、本研修を実施）
- ・ 講義（★ハンドブック活用）

(※) 講師：株式会社きのえね 白蓮会館九州本部 山崎 博王 氏 ※メイン

株式会社きのえね 白蓮会館九州本部 支部長 大野 英章 氏 ※補足等

#### ③ 研修内容

- ・ 法人が実施している障害のある子ども向けの空手教室（「いーはとーぶ空手」）の子どもの特徴とその指導例を絡めて説明した。

<ハンドブック活用>

- ・ P.13 指導対象者とのコミュニケーション

障害のある人もない人もできるのがパラスポーツ。コミュニケーションを取っていくことで、障害への理解が見込まれる。

#### 【本空手教室に通う子どもの例】

空手教室に通う Aさんは、先生に足の開脚を見せてくれる。先生に見せて褒めてもらうというコミュニケーションをとることに喜びを感じ、居場所があると感じている。このような形で空手を続けることができ、良い運動習慣になっている。

- ・ P.26、28 知的障害・発達障害、精神障害

職員が主に接している障害種を中心に解説した。指導のポイントは粘り強く、わかりやすく、視覚情報で伝えること。その中でも特に大事なものは粘り強く接することであると、いくつかの事例を交えて説明した。

**【研修実施者の声】**

- ・ 遊び方やレクリエーションの実例を4ページほどにまとめてあるとよい。遊んでいる様子など、障害によって4種類くらい挿絵や写真付きで事例があるといい。
- ・ 普段は障害のない人を指導している指導者が、自身の指導の中に活用しやすいようなレクリエーションの事例を紹介すると、さらに活用の幅が広がる。そうした事例をハンドブックと一緒に配布すると、さらに理解が深まるのではないかと。

## 事例 17 公益社団法人日本リハビリテーション医学会

### 【研修参加者情報】

対象：医療関係者

参加者詳細：

同学会員を中心としたリハビリテーション医療に関係のある医師および医療関係者（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、義肢装具士等）

### ① 研修会の目的

- ・ 本研修会は、第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会の日本リハビリテーション医学会パラスポーツ委員会セミナー企画として実施した。
- ・ 今回の研修会では、パラスポーツ指導経験の有無にかかわらず、医療従事者間の情報共有、ネットワーク構築を図るために、研修会の中で総合討論（グループワーク）の時間を設けた。

### 【研修情報】

### ② 研修プログラム

- ・ 【講演】①リハビリテーション診療におけるパラスポーツの意義  
（緒方氏★ハンドブック活用）
- ・ 【講演】②リハビリテーション診療におけるパラスポーツ導入時の留意点  
（上出氏★ハンドブック活用）
- ・ 【総合討論】

(※) 講師：①東京大学医学部附属病院 リハビリテーション科 緒方 徹 氏

②国立成育医療研究センター リハビリテーション科 上出 杏里 氏

※座長：横浜市立大学医学部 リハビリテーション科学 中村 健 氏

### ③ 研修内容

<ハンドブック活用>

- ・ 前半は緒方氏がハンドブック第1章、第2章のパラスポーツの意義と、日常の診療について説明。普段の診療でスポーツを導入したいときにどうするか、その意義を説明した。
- ・ 後半は上出氏が第3章「障害のある方へのスポーツ指導の実践」について紹介。症例を通して、障害のある子どもにスポーツを導入するときの工夫（学校や地域スポーツ機関との情報共有、連携など）を説明した。
- ・ 講義後に、参加者は5つ程のグループに分かれて、以下の症例にスポーツを導入・検討する際に、どういった点に注意すべきか、具体的な導入提案も含めて検討し、参加者間で共有した。

【症例1】40代男性：脳脊髄炎による対麻痺患者。高次脳機能障害を合併し、家に引きこも

りがち。スポーツ経験あり。

【症例2】小学生女兒：二分脊椎で排尿障害（尿失禁）のある児。パラスポーツに興味があるが、排泄ケアが心配で、男の子と一緒に参加を嫌がっている。

#### 【研修実施者の声】

- ・ 各障害の基本的な説明、スポーツ指導方法について、分かりやすく書いてあり、二次元コードで情報の取り出しができるようになっているので、活用しやすいと思います。
- ・ 医療関係者に限らず、学校の先生やスポーツ関連施設の方にもハンドブックを知ってもらいと、障害ごとにどう関わればいいのかを知るきっかけになるとと思います。

## 第3章 受講者アンケート結果

### 1. エグゼクティブサマリー

#### (1)調査項目の構成

本調査は、主に以下4つのパートで構成されている。

- ① 属性
- ② スポーツ指導経験/障害のある人へのスポーツ指導経験について等
- ③ 研修・ハンドブックについて
- ④ 自由記述（研修やハンドブックで印象に残った内容等、ハンドブックについてのご意見）

#### (2)調査結果の概要

研修やハンドブックに関する質問では、下記のような結果がみられた。

##### 質問1. 「研修は理解しやすかったですか。」

- 障害のある人へのスポーツ指導経験「なし」の方の9割以上が「とてもそう思う」「そう思う」と回答

##### 質問2. 「ハンドブックの内容は役に立つと感じましたか。」

- 障害のある人へのスポーツ指導経験の有無に関わらず、全体の9割近くが「とてもそう思う」「そう思う」と回答。

##### 質問3. 「研修やハンドブックを通じて、障害のある人へのスポーツ指導方法の理解が深まりましたか。」

- 障害のある人へのスポーツ指導経験「なし」の9割以上が「とてもそう思う」「そう思う」と回答。

##### 質問4. 「ハンドブックの活用を通じて、今後、障害のある人へのスポーツ指導に積極的に関わりたいと思いますか。」

- 障害のある人へのスポーツ指導経験「あり」の8割以上、「なし」の7割が「とてもそう思う」「そう思う」と回答。

## **2. 調査概要**

### **(1)調査対象**

事例集掲載の 17 団体中、受講者アンケートを承諾した 12 団体

### **(2)調査方法**

研修実施団体にメール（電子媒体）による依頼文書の配付を行い（現地取材の場合は直接、研修実施担当者に手交）、研修会場にて受講者に文書を配付しアンケート URL と二次元コードを案内の上、研修終了後にウェブアンケートを実施

### **(3)実施時期**

令和 7 年 7 月 29 日（火）～令和 7 年 12 月 15 日（月）

### **(4)回収数**

有効回答数：723 件

### 3. 調査結果及び分析

#### 1. 属性

##### (1) 職業 (全体)

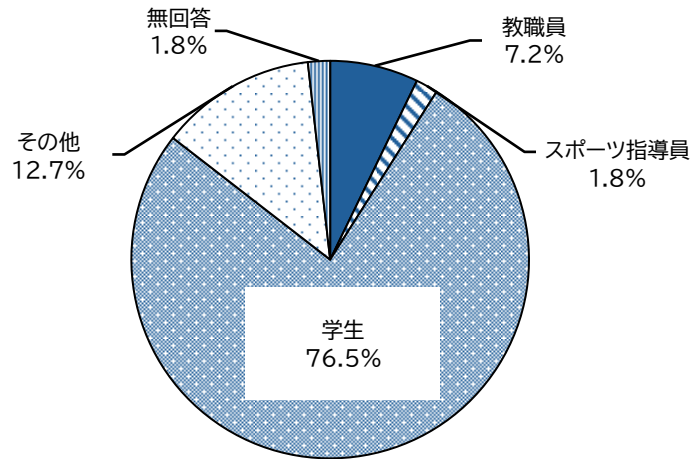


図1 職業 (n=723)

##### (2) 学年 (学生の受講者のみ)

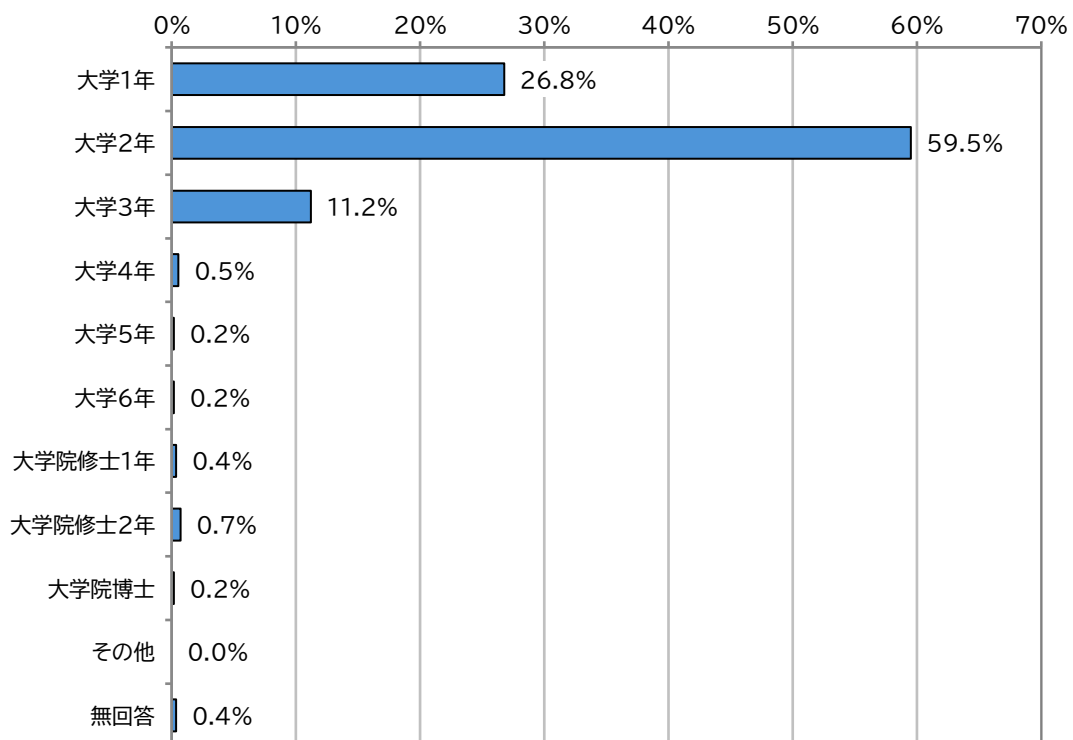


図2 学年 (n=553)

(3)年代 (全体)

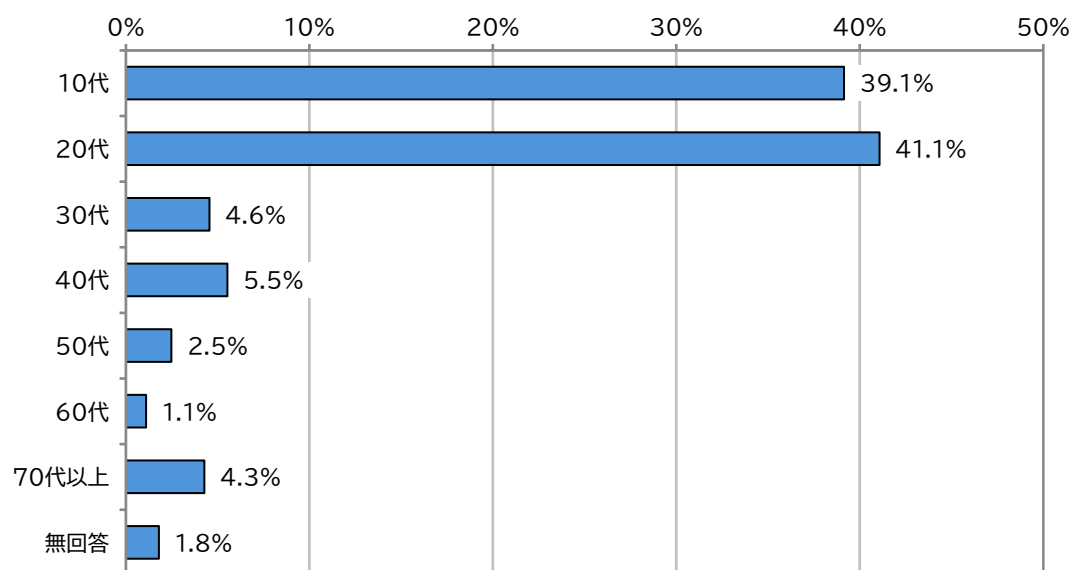


図 3 年代 (n=723)

## II. スポーツ指導経験/障害のある人へのスポーツ指導経験について等

### (1)スポーツ指導経験の有無（学生以外の受講者のみ）

#### ①スポーツ指導経験の有無（単一選択、学生以外の受講者のみ）

スポーツ指導者等（学生以外の受講者）のうち、55.3%がスポーツの指導経験「あり」と回答した（図4）。

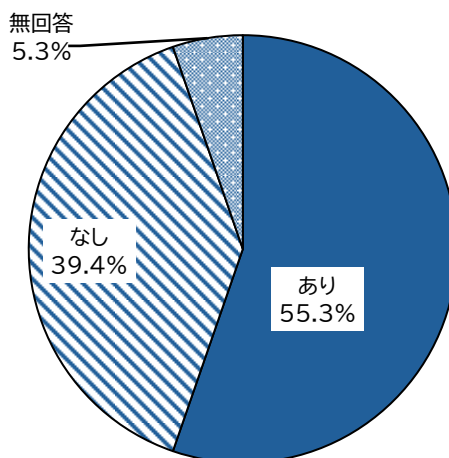


図4 スポーツ指導経験の有無（n=170）

#### ②障害のある人へのスポーツ指導経験の有無（単一選択、学生以外の受講者のうち①でスポーツ指導経験「あり」と回答した者のみ）

(1)①でスポーツ指導経験「あり」と回答した方のうち、障害のある人へのスポーツ指導経験「あり」と回答した方は、55.6%であった（図5）。

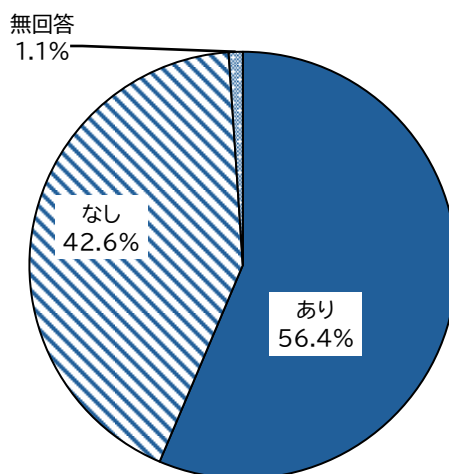


図5 障害のある人へのスポーツ指導経験の有無（n=94）

(2) 障害のある人とのスポーツ経験の有無（単一選択、学生の受講者のみ）

学生のうち、障害のある人とのスポーツ経験「あり」と回答したのは、44.7%であった（図6）。

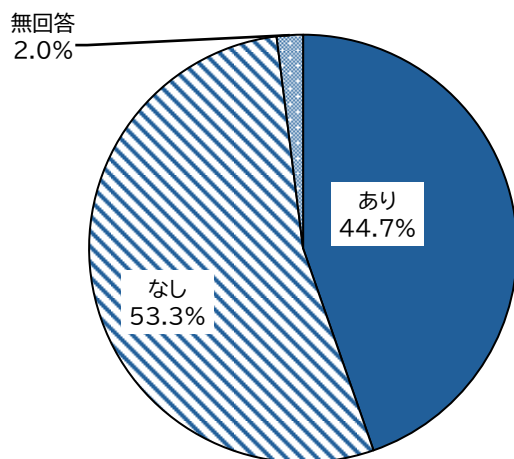


図6 障害のある人とのスポーツ経験の有無（n=553）

### III. 研修・ハンドブックについて

#### (1) 研修は理解しやすかったか（単一選択、全体／学生以外の受講者）

受講者全体の9割近くが「とてもそう思う」「そう思う」と回答した（図7）。

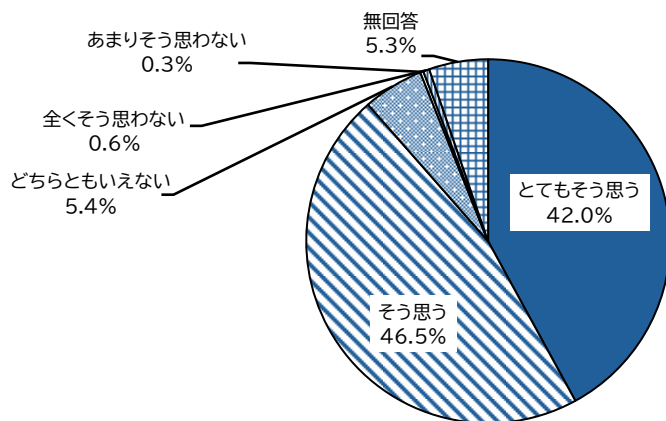
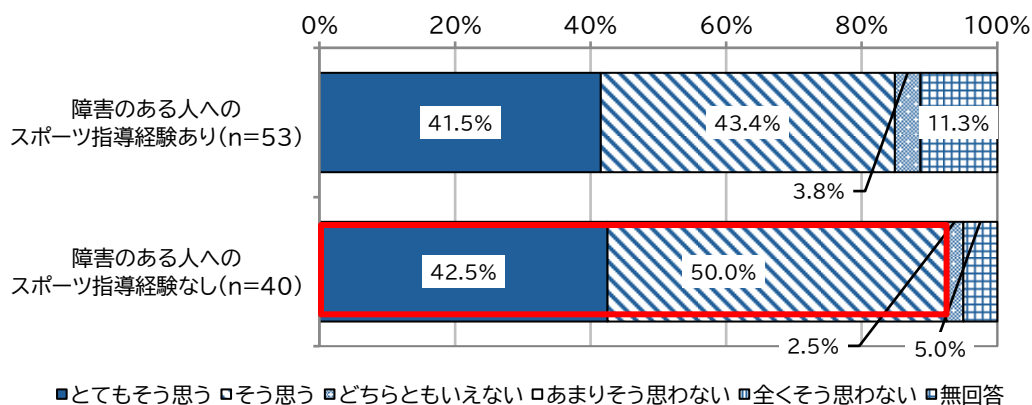


図7 研修は理解しやすかったか (n=723)

図8は学生以外の受講者のうち、障害のある人へのスポーツ指導経験の有無別に「研修は理解しやすかったか」についての回答を整理したものであるが、障害のある人へのスポーツ指導経験「なし」の方の9割以上が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した（図8）。



※障害のある人へのスポーツ指導経験有無のn数について、無回答1件は除外。

図8 障害のある人へのスポーツ指導経験有無×研修は理解しやすかったか (n=93)

(2)ハンドブックの内容は役に立つと感じたか（単一選択、全体／学生以外の受講者）

障害のある人へのスポーツ指導経験の有無に関わらず、全体の9割近くが「とてもそう思う」「そう思う」と回答した（図9は全体、図10は学生以外の受講者のうち、障害のある人へのスポーツ指導経験の有無別に整理したもの）。

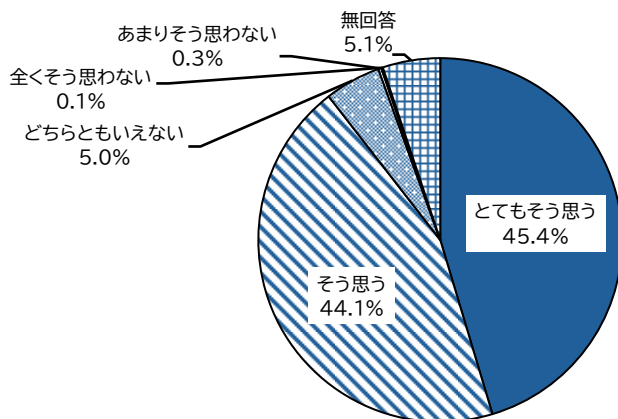
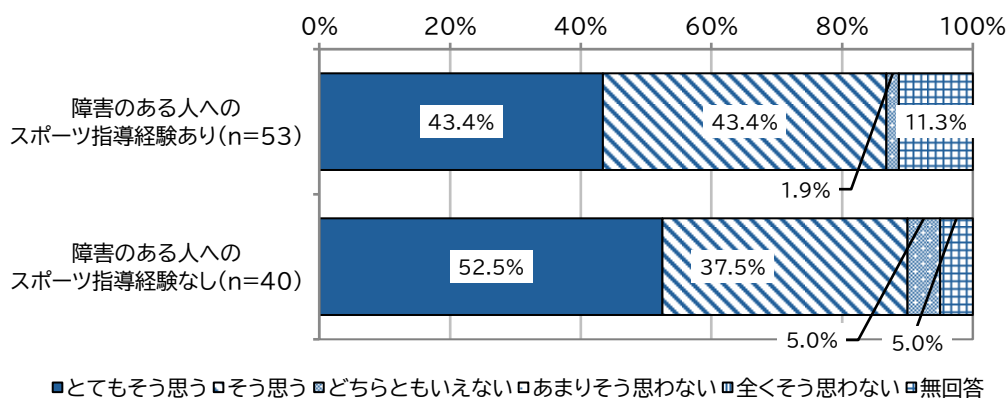


図9 ハンドブックの内容は役に立つと感じたか (n=723)



※障害のある人へのスポーツ指導経験有無のn数について、無回答1件は除外。

図10 障害のある人へのスポーツ指導経験有無別×ハンドブックの内容は役に立つと感じたか (n=93)

(3)研修やハンドブックを通じて、障害のある人へのスポーツ指導方法の理解が深まったか。  
(単一選択、全体/学生以外の受講者)

受講者全体の8割以上が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した(図11)。

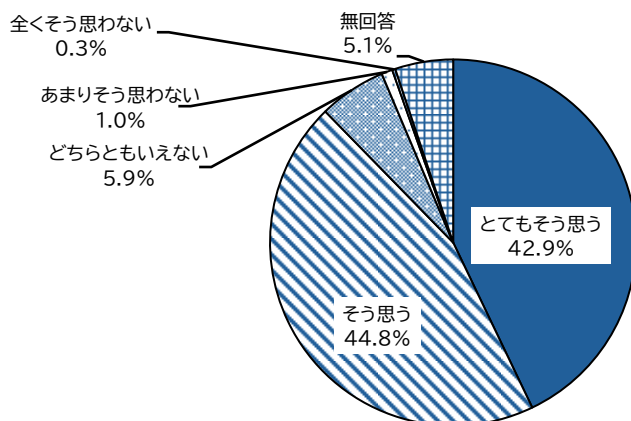
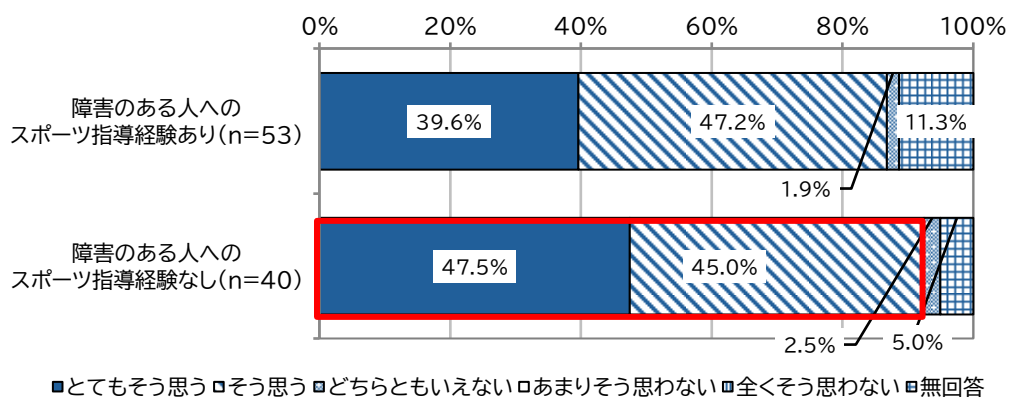


図11 研修やハンドブックを通じて、障害のある人へのスポーツ指導方法の理解が深まったか (n=723)

障害のある人へのスポーツ指導経験有無別にみると、障害のある人へのスポーツ指導経験「なし」の9割以上が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した(図12)。



※障害のある人へのスポーツ指導経験有無のn数について、無回答1件は除外。

図12 障害のある人へのスポーツ指導経験有無別×研修やハンドブックを通じて、障害のある人へのスポーツ指導方法の理解が深まったか (n=93)

(4)ハンドブックの活用を通じて、今後、障害のある人へのスポーツ指導に積極的に関わりたいと思いますか。(単一選択、全体/学生以外の受講者)

受講者全体の9割近くが「とてもそう思う」「そう思う」と回答した(図13)。

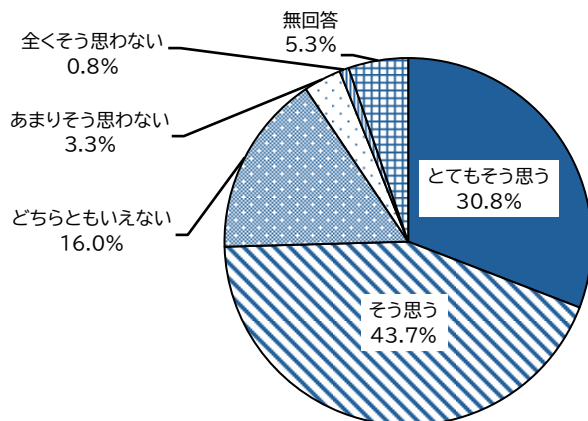
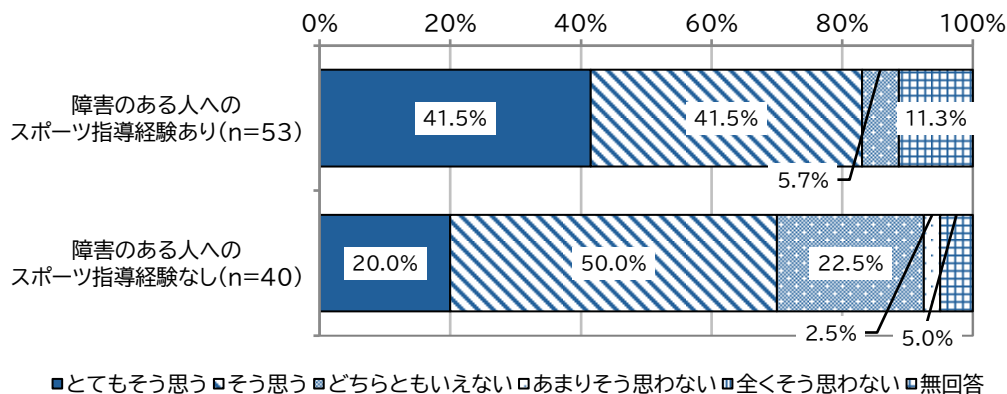


図13 ハンドブックの活用を通じて、今後、障害のある人へのスポーツ指導に積極的に関わりたいと思うか (n=723)

障害のある人へのスポーツ指導経験有無別にみると、障害のある人へのスポーツ指導経験「あり」の8割以上、「なし」の7割が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した(図14)。



※障害のある人へのスポーツ指導経験有無のn数について、無回答1件は除外。

図14 障害のある人へのスポーツ指導経験有無別×ハンドブックの活用を通じて、今後、障害のある人へのスポーツ指導に積極的に関わりたいと思うか (n=93)

## IV. 自由記述

(1)研修やハンドブックで印象に残った内容、今後役に立つと思われた内容（自由記述、主なもの）

### ■研修やハンドブックで印象に残った内容、今後役に立つと思われた内容■

#### ①教職員

- ・ 障害のある人への指導に留まらず、運動が苦手な児童に対する指導にも生かすことができると感じました。
- ・ 楽しんでもらうように指導するという言葉が印象に残りました。
- ・ ダンスも柔道も生徒に主体的に学ばせる上で初めの導入が大切だと思う。公開の伝達研修で様々なアイデアを知ることができて今後の自分の授業の中に活かしていきたいと思う。
- ・ 視覚的、聴覚的など色んな視点からアプローチすることが大切だと感じた。
- ・ 個に応じた配慮であったり、合理的な配慮を行うにあたって、指導者が主導で中々動けないということは始めて知ったので、保護者等と協力体制を作っていきたい。
- ・ ハンドブックを通して障害の有無に関わらずその場にいるすべての子どもたちにとって学びにつながるためのやり方を学ぶことができました。ありがとうございました。
- ・ 楽しく運動をする方法や生徒への関わり方、声のかけかた勉強になりました、ありがとうございました
- ・ 通常の学級に配慮を必要とする生徒が在籍しているという観点を常にもち、誰にでも理解しやすく授業を展開するということが大切ということを改めて実感した。また、アダプテットの観点で教師自身の思考も常にアダプテットする必要があると認識した。
- ・ スポーツというと固く捉えがちだったが、自由で良いと言うように発想転換できた。
- ・ 指導するにあたって、引き出しをたくさん作ることが大切だと感じた。今後たくさん学び、様々な人へ指導できるようスキルを高めていきたい。
- ・ 色々な情報がある中で安心して得られる情報のためハンドブックは導入にあたり非常に分かりやすかったです。

#### ②スポーツ指導員

- ・ 職員間（特に他部署）で障害のある人への指導、対応で困ったことや経験談など、共有や同じテーマでディスカッションする機会がなかったので、有意義な研修でした。指導にかかわらず、障壁を下げ接する（マインドセット）指導対象者とのコミュニケーションの方法などハンドブックを活用したいと思います。
- ・ どのページも役に立つと思いましたが、特に17ページ以降の活用ページについては施設の職員全員で確認したい内容と感じております。
- ・ どんな障害をお持ちの人に対しても、声掛けの重要性を改めて学びました。また、自分自身のからだを使って触ってもらったり、持ってもらったりすると伝わりやすいということを知り、早速実践していきたいと思っております。
- ・ ハンドブックに記載されている障害別の指導ポイントを確認しながら、事前準備や指導の進め方を考えることができる点でとても価値のあるものだと感じました。

#### ③学生

- ・ 障害についての説明が分かりやすく記載されていた。実際に障害のある人とスポーツを行うことで付いた知識がより生きると思った。
- ・ 障害の特徴を指導者が理解し、指導の際に留意することが詳しく書いてあり、今後の指導に役立つと考える。
- ・ ハンドブックの中で、フォームの基本やウォーミングアップの重要性について書かれ

ていた部分が印象に残りました。練習前の準備をしっかり行うことでケガの防止やパフォーマンスの向上につながることを学びました。今後は、正しい姿勢や動きを意識して、より安全で効果的な練習を心がけたいと思います。

- それぞれの症状によって指導や工夫の仕方が変わっているのが印象に残りました。
- その障害の特徴、指導するポイントなどについて書かれていて役に立つと思った。実際に自分も障害を持っていて、さまざまな指導や工夫をされた。そのことについて詳しく書かれていてわかりやすいと感じ、今後も見たいと思った。
- 精神障害のある人とスポーツで関わったことがないため、今後、関わる機会があった場合は、今回教わった関わり方を中心に努めたい。
- 対象者を指導する際に、障害の特徴を把握したり、医師などからの指示のもとで運動メニューを組むことが大切であるとともに、常に指導する環境を整えておく必要があることを学びました。
- 指導をするにあたって、障害のある人の理解は大切であることは、これまでの講義から学んできた。しかし、今回服薬の有無などの面も把握することが大切であったことを理解し、印象に残った。
- 私は今後特別支援学校の教員の資格免許をとろうと考えているため、障害を持っている人に対する理解を深める手順などを知れたことが今後役に立つなと感じた。
- 障害のある人に指導するといっても、様々な障害があり、それによって把握するポイント、指導におけるポイントがかなり異なってくることを理解した。健常者でさえ一歩間違えば命の危険もある水泳を障害を持つ人達にたいして指導するのは決して簡単なことではないけど、ちゃんと相手を理解して責任をもって指導にあたることを大切にしたいと思うし、今後指導を行う機会があれば、何よりも対象者理解を丁寧に行い、安全と楽しいという気持ちを第一に出来たらいいなと思った。
- 自分が実習で学んだことが多く使われていて今後も自分の学びが役立つことを知れた。
- 指導するにあたって相手の障害やどういうことが難しいなどのことを理解して相手の立場になって考えることが大事だと感じた
- 障害を持っていたとしても少しの配慮や工夫により、実施できることは多くあるということ。そのために、コミュニケーションを図ることが大切であるということがわかった。
- スポーツを実施するための工夫としてという内容で、適切にその競技をする人に合わせて目的とルール、用具などを変更し、場所などの大きな環境も工夫することで実施しやすくなるということがわかった。
- スポーツを実施するための工夫を変えることで障害を持っている人達でも楽しむことができることがわかった。
- 障害がある生徒に対しての工夫のバリエーションがとても多く記載されていた。また、グループワークで話し合うことで自分だけでは出てこなかった視点を得ることができて、とてもためになることがあった。
- スポーツを実施するための工夫で、大枠に環境の工夫がありその中に実施する活動の工夫があり、さらにその中に指導対象者向けの工夫があり環境がクリアされればその次にルールや用具の工夫、それができてからコミュニケーション方法などの指導対象者向けの工夫に取り掛かることが大切だということ。
- 障害の種類に分けて特徴や指導対象者の特徴を把握する際のポイント、指導のポイント、指導者へのメッセージが細かく書かれていて、これなら初めて指導する人でも注意すべき点とかが明確で教えやすかったり、様々な状況にも対処しやすかったりするなと思ってとても役に立つものだなと思った。
- 心構えや環境整備といった情報から、指導のポイントまで書いてあり、わかりやすかった。
- 身体が不自由な人たちに自分達が感じた楽しさをどのように同じ感情にさせるかを考えること、どのように伝えるか、どう言語化するかというのが自分の言語化能力にも役

立つと思った

- ・ 指導対象者と一緒に活動することでその人が成長してだけでなく、指導者自身も成長していくということ。
- ・ 例えば視覚障害のある人でも、全く見えない場合や、やや見えるなど障害の具合によって競技の工夫が必要だと思った。
- ・ ルールやモノなど、その人にあった形で変更したりすることでより楽しくスポーツに取り組めることができるということを実際に試したり、ハンドブックの内容で印象に残った。
- ・ 指導のポイントが書いてあったため、指導者になった時に、障害のある人の生徒がクラスにいた場合に活かせると思った。
- ・ たくさんの種類の障害がある中で色々な障害を持つ方の特徴や医療知識、指導のポイントなどがこの本1冊で詳しく知ることが出来た。
- ・ 障害の概要についての説明と、その人たちがスポーツできるような環境をどのように作るかが書かれており、興味深かった。
- ・ その人がどれくらいできるのか、それをするのがどれくらい難しいのかを理解することで必要なサポートや工夫がわかると思うから、研修などを通じて自分で実際にその人の立場になってみるということが大事だと思った。

#### ④その他

- ・ 【印象に残った場面】 グループワーク 【理由】 現場レベルの様々な悩みや課題、成果などを聞くことができたから。
- ・ ハンドブックを読んで、まず本人の意思、希望を確認することが大切なことを再確認できた。我々はそれにどうソフトとハード（&ハート）で寄り添えるかだと思う
- ・ 障害は個性であり、さまざまな種類があり、障害を理解することはとても大事だと改めて痛感しました。ハンドブックで障害ごとの対応方法等が分かりやすく記されていたので、今後に活用しやすいと思いました。
- ・ スポーツをすることで、障害があるなしに変わらず見込まれる効果、障害のある人に見込まれる効果があることがわかり興味深かった。特に発達障害の方への指導の方法は役に立てていきたいと思います
- ・ スポーツ指導に限らず、障害のある人への関わり方は、粘り強く関わっていくことが大事であると改めて感じました。
- ・ スモールステップで地道に…はスポーツだけでなく生活等全般において大切な事だと思いました。
- ・ 障害があっても無くてもあっても、スポーツをする事が健康的、精神的、社会的にとってもメリットがある事を学び、スポーツをするためには本人だけではなく、周りの人達の支えが必要である事を学んだ。障害のある人達への配慮も異なるので、それぞれの特性を踏まえる必要があることを学んだ。
- ・ 様々な障害があっても、できるスポーツがあることが分かりました。ハンドブックには、具体的なスポーツ内容の例もあるようなので、参考にしたいと思いました。
- ・ 指導者のマインドセットは、自分自身もスポーツを経験した上でとても大切だと感じます。
- ・ 障害の種類やその障害に適した対応、指導法などの説明がとても参考になりました。
- ・ 障害のある人のスポーツの効果や必要性を理解しました。今後、利用者様の疾患や特性を理解し、その方に応じたスポーツ支援ができればいいなと思いました。
- ・ スポーツに関わることは実際スポーツをしている人だけだと思っていましたが、送迎をしたりしている親も関わっていると聞いて私達も貢献できているんだなと嬉しくなりました。
- ・ 運動をするにあたって大事なことを教えていただきました。プログラムやポータルサイトで運動遊びを紹介されているサイトは今後の活動で取り入れたいと思います。
- ・ 障害のある人もスポーツを通じて 身体を動かすことがからだや精神にいいことが分か

った。

- ・ 障害がある人がスポーツをすることの効果は心理的な影響含めたくさんあると思うので、指導者としては難しいけれど、そこに何らか関わればとは思いました。
- ・ ハンドブックを拝見すると、大変具体的に、障害のある人が困っていることや関わるうえでの留意点が記載されており、何となくわかっていそうでわかっていなかったことを知ることができた。上記情報が、障害別にページが設けられており、これ一冊あればかなり心強いのではないか。

## (2)ハンドブックについて、その他のご意見・ご要望など（自由記述、主なもの）

### ■ハンドブックについて、その他のご意見・ご要望など■

#### ①教職員

- ・ ハンドブックについて、教育現場、評価評定の観点について内容が薄いと感じた。パラスポーツ指導者に向けては入門として良いと思ったが、学校現場を想定して長い目で見た内容にするのであれば指導者ではなく教員目線のハンドブックがあっても良いと感じた。
- ・ 今後、日本語以外の言語でハンドブックを作成する予定はありますか。介護業界も外国の方のサポートが増えてきている中で、パラスポーツでもこれから外国の方のサポートをお願いしていくとスポーツ指導者認定者が増えて行くように考えます。例)日本語学校にチラシ、講習会実施等 既に行っていたら申し訳ありません
- ・ 見やすいわかりやすい動画等が見られるようなものがよい。
- ・ 障害者医療に関わる機関に広く周知してほしい。

#### ②スポーツ指導員

- ・ 地域のパラスポーツ指導をされている方と、意見交換や、誰もが競技導入しやすくするには？と言う課題消化が少しできました。ありがとうございました。

#### ④ 学生

- ・ 医療機関と地域スポーツ活動のシームレスな連携が必要で、ハンドブックを共通言語として医療機関から地域の指導者向けに連携シートのようなものと紐づけられたらさらにいいものになると感じた。
- ・ ハンドブックは、障害を持った方の指導に困っている指導者に届くべきものだと思います。とくに教育現場や各都道府県のスポーツ協会に周知頂ければより広がっていくと感じました。
- ・ 今後活用されていくにあたって、実際に使用した方々の声や意見を掲載いただくとより想像しやすいと感じました。
- ・ 障害のある人が参加する可能性のある団体はもちろんですが、将来障害を持つ方の指導者やチームメイトになりうる子供たちにも使えたらいいと思いました。
- ・ もう少し文字を大きめにしてほしいです
- ・ 指導にあたってどのようにすべきかについては分かったが、もう少し具体的な例が知れるとよかったと感じる。

#### ⑤ その他

- ・ 帰ったら熟読し、周りの関係者に紹介します。
- ・ 小学校、中学校などでも今回のような講習をしてほしい。
- ・ データや障害の種別を掲載していただいていることにより、受講者の知識が上がっていくとても良い教材だと思いました。しかし、知識があるだけでは、現場で対応することは難しいと感じています。より具体的で詳細な現場レベルでの活用例（対応方法や声

がけの内容等)を併せて掲載していただけると、初めて指導に当たる方や熟練の方など、幅広い層に向けて活用できるハンドブックになるかと感じました。

- 障害は千差万別だと思うが、代表的な事例集(ケーススタディ)があると良い※別冊でも
- 今回のロールプレイがあったように動画で障害のある人に応じた対応方法等があれば、もっと実践で活かせると思いました。
- 具体的な事例や各障害の特徴が十分に掲載されており、かつ、難しすぎる内容ではないため、万人の方に活用できると思いました。
- 障害のある人への指導に限らず汎用性が高い ※表紙上部の「スポーツ指導に携わる方に読んでいただきたい」の文言が良い。入門にして必携。
- サイズが小さくなると持ち運びしやすいかと感じました。
- 途中に、写真やイラストもあり、分かりやすく良かったです。

# 第4章 まとめ

## 1. 本事業を通じて得られた成果

本事業では、ハンドブックを活用した研修を行っている団体にヒアリング調査を実施し、ハンドブックの活用事例集として、「スポーツ支援者の資質向上のための『障害のある方へのスポーツ指導・関わり方 入門ハンドブック』活用事例集 -指導スキル向上のための研修等の実践と工夫-」を作成した。

本事例集では、各研修実施団体の事例に加え、受講者アンケート結果や、ハンドブック活用のポイントについてのまとめを掲載している。図15は事例集の表紙と本事例集の見かた、研修対象者一覧となっている。



図15 『障害のある方へのスポーツ指導・関わり方入門ハンドブック』 活用事例集

なお、ハンドブックを活用した研修実施のポイントは以下の通り。

### 【ハンドブックを活用した研修実施のポイント】

#### ポイント①：ディスカッションのツールとして活用

⇒ハンドブックが、ディスカッションを行う研修において、単なる課題や困りごとの共有のみならず、対応策を考えるための情報・材料となり、準備の負担が軽減される。

#### ポイント②：パラスポーツ関連以外のスポーツ授業での活用

⇒一般的なスポーツ実技の授業でハンドブックを活用することで、障害のある人が障害のない人と一緒にスポーツに参加する場合、対応のポイント等をより具体的に伝えやすい。

#### ポイント③：定期的な職員研修等で活用

⇒スポーツ指導の実践を軸にポイントが整理されているので、定期的な職員研修等の中でも使いやすい。

#### ポイント④：座学・実技で複数回活用

⇒座学だけではなく、ハンドブックの内容を実技（体験）と結びつけると、より深く知識を定着させることにつながる。

## 2. 今後の取り組みの提案

事例集では、「どのように研修を組み立てれば参加者に具体的な指導方法が伝わるのか」、「現場で役立つ指導のコツやポイントは何か」といった実践的な内容を受講者に伝えるための、研修会などにおけるハンドブックの活用の仕方や研修会の構成などの工夫が整理されている。こうした工夫は、障害のある人への指導経験がない方でも必要な知識や配慮点を理解し、指導場面を具体的にイメージしやすくなることが期待される。また、障害の有無にかかわらず指導に携わる方々に新たな視点や指導のヒントを提供する機会になり、事例を通じて、ハンドブックを活用した研修等の実施方法を知ることができる。

ハンドブックの内容は、障害のある人への指導のみならず、運動の苦手な方への指導や、子ども、高齢者への指導等、指導の対象は範囲の拡大も見込まれるものであり、本事例集によりハンドブックを活用した研修等が広く各地で開催されることで、障害の有無に関わらず、スポーツ機会の拡充が図られるものであると考えられる。

以上を踏まえ、本事例集については、スポーツクラブ、各競技団体の指導者養成、地域のスポーツ指導員の研修、特別支援学校の教員養成等といった研修を実施する可能性のある者に対し、広く周知することが重要である。